

オトカ

「日本の劇」戯曲賞2010最優秀賞

登場人物

沼田	康裕	聡子	昌代	信二	麻佑	由美子	信一
(30)	(38)	(30)	(35)	(40)	(19)	(50)	(52)

海のない町。
とあるガラス屋。

上手奥の出入口はこの家の玄関に続く。

上手奥に応接用のソファ。

上手前の出入口は廊下に続いていくらしい。風呂や娘の勉強部屋に続く。

下手奥の出入口は台所などに続く。

上手前に短い階段が設置されている。そこを下りた舞台手前が作業場であり、窓ガラスなどが無造作に立て掛けてある。

畳敷きの茶の間には家具が置かれてある。茶箆筒、座卓、扇風機（季節により石油ストーブ）……。

ヒグラシの声。

夏の夕方。

淀んだ空気を扇風機がかき混ぜている。

座卓に信二と由美子。

由美子はお茶をいれている。

信二 ……そうですか。そりゃ、もったいないことしましたね。

由美子 ほんとよお。わざわざしなくていい苦労してんだもん。高いお金出して。

はい。(と、お茶を)

信二 あ、どうも。

由美子 予備校の授業料だけで年間50万もかかんのよ？

信二 そんなに？

由美子 そうよお。他にも、やれ模試だ参考書だ講習だって、しょっちゅう。そ

れで来年受かる保証なんてどこにもないんだに。

信二 (ぼうっと、お茶を見つめて) ……。

由美子 どうかした？

信二 え？

由美子 なんか、冷たいものが、よかった？

信二 あ、いえいえ……。いただきます。(お茶をすする) あち、あちツ！

由美子 まったく何が気に入らないんだか……。

信二 でも、麻佑ちゃんには麻佑ちゃん、何か考えがあるんでしよう。

由美子 考え？

信二 ええ。

由美子 考えって、どんな？

信二 いや、それは麻佑ちゃんに聞いてみないと、わかんないけど……。

由美子 ありやしないのよ、そんなもん。すーぐ、ひとに流されんの。だいたい

二年生の冬まで理系だったんだに、進路の「適性検査」かなんかで、急

に法学部受けるとか言い出して。

信二 はあ……。

由美子 理系の適性がないっていうだけなんだに。そんなんだもん、ひとつ受かっただけでも、ありがたく思わなきやあ。

信二 でも、よく、あの兄貴が許しましたね。

由美子 え？

信二 浪人。

由美子 ああ。そりや、もう、たいへんだったんだに。二人して、何日も口きかないで……あ。（外に目をやる）

軽トラックのエンジン音。

由美子 お父さん、帰ってきた。

信二 （そちらに目をやり）……。

由美子、立ち上がる。

と、信二も腰を上げる。

由美子？

信二 俺、やつぱ、出直してきます。

由美子 へ？ なんで？

信二 ちよつと、急ぎの用、思い出して……。

由美子 だって、お父さんに急ぎの用だったんじゃないの？

信二 (返答に窮して) や……。

と、作業場から、信一、現れる。

由美子 あ、お父さん、おかえんなさい。

信一 いただきます。

信二 よお、兄貴……。

信一 ……。(冷淡に) なんだ、来てたのか。

信二 　　ん……。

そのとき、奥で電話が鳴る。

由美子 はいはい……。 (奥へ去る)

信一 (茶の間にあがって) 何しに来た？

信二 いきなり、そうゆう言い方、なかんべ？

信一 (座り) ……。何、そんなとこ、突っ立ってんだよ？

信二 え？ ああ……。 (座る)

信一 で？ 何の用だよ？

信二 べつに、何の用、ってこともねえんだけど……。

信一 金ならねえぞ。

信二 ……。

信一、煙草を取り出す。が、空である。空箱をひねりつぶす。

信二 いいよ。(と、自分の煙草を)
信一 あ?
信二 これでよければ。
信一 禁煙してんだよ。
信二 ……。(しもう)
信一 そういや、おまえ、あれ、どうした?
信二 え?
信一 あれ。
信二 何だよ、あれって?
信一 位牌だよ。
信二 え?
信一 白木の位牌。
信二 ああ……。
信一 ほんとなら四十九日までに、黒い位牌に替えてなきやいけねえもんなん

だぞ。

信二 わかっているよ。

信一 わかっているなら、さつさとやれよ！

信二 やるよ、やる、やりますよ。

信一 やるやるやるやるって、はあ（もう）、三回忌じゃねえか。おふくろだ
って成仏できなかんべ？

信二 そんなに言うなら兄貴が自分でやれよ。

信一 あ？

信二 長男だんべ？

信一 跡取りは、お前だんべな。

信二 べつに、取りたくて跡なんか、取ったわけじゃねえよ。兄貴が婿養子な
んかに入るから……。

信一 今さら何言ってるんだ。だいたい何でこういうことになったのか、わかっ
て言ってるのか？ 坊さんにやるお布施、お前が競馬でスツちまうから

……。

信二 競輪だよ。

信一 どっちだっついていいんだよ、そんなこたあ！

信二 はあ、いいよ、その話は。

信一 いいこたなかんべ！

信二 済んだこと、蒸し返すなよ！

信一 どの口で言ってるんだ？ そういうこたあ、使い込んだ金、耳揃えて返してから言え！

上手奥から麻佑、現れる。

麻佑 ただいまあ。……あれ？ 信二おじちゃん。

信二 おかえり……。

麻佑 どしたん？

信二 ん？

麻佑 珍しい。

信二
そ？

麻佑
しばらく来てなかったに。

信二
麻佑ちゃん、元気にしてるんべか、と思つてき。

麻佑
またまた。

信一
（麻佑に）はあ、終わったんか？

麻佑
え？

信一
予備校。

麻佑
今日、模試だもん。

信一
モシ？

麻佑
模擬試験。

信一
試験だと早いのか？

麻佑
世界のジョーシキでしょ？

由美子、戻ってくる。

由美子 あ、麻佑ちゃん、おかえり。

麻佑 たいま。

由美子 お父さん、電話。

信一 俺？

由美子 ええ。

信一 誰？

由美子 だから、お父さん。

信一 いや、誰から？

由美子 ああ。聡子さん。

信一 聡子？

信二 ……。

信一 聡子が、なんの用だ？

由美子 知りませんよ。出てくさいよ。

信一 ああ。

信一、去る。

由美子 あ、信二さん、お茶、おかわりは？

信二 あ、いえ、もう……。

由美子（麻佑に）で、あんた、どうだったの？

麻佑 え？

由美子 模試。できたの？

麻佑 まあまあ。

由美子 まあまあって？

麻佑 できたといえれば、できたし、できなかったといえれば、できなかったし……。

由美子 大丈夫なんでしょうね？

麻佑 何が？

由美子 もう一年なんてことになんないですよ？

麻佑 ……。

麻佑、上手前へ去る。

由美子 まったく。

信二 なんか、言っていました？

由美子 え？

信二 聡子。電話で……。

由美子 なんかかって？

信二 いや……。

由美子 あ、そうだ！ なーんか忘れてると思ったら、あたし、スーパーでお魚さばいてもらって、そのまま帰ってきちゃった。

信二 ……ああ……。

ちようどそのとき、信一、戻ってくる。

由美子 お父さん、ちよつと行つてきます。

信一 何？

由美子 お魚とりに。

信一 魚？！

由美子、去る。

信二 ……何だつて？

信一 ん？

信二 聡子。何の用？

信一 ああ。礼服貸してくれないかつてさ。

信二 礼服？

信一 康裕くんの。会社の同僚の結婚式だと。まさか自分が呼ばれると思わな
いで後輩に貸しちやっただと。間抜けな話だよ。

信二 そんなだけ？

信一 ん？

信二 あ、いや……。けっこう、抜けてるとこあるよな。康裕くん。

信一 一本、くれよ。

信二 え？

信一 煙草。

信二 ああ……。全部やるよ。

信二、信一に煙草を箱ごと渡す。

信二 じゃ、俺、帰るわ。(立ち上がる)

信一 え？ 何か用じゃなかったのか？

信二 いいよ。

信一 いいって？

信二 ちよっと近くまで来たから、ついでに寄っただけだに。

麻佑が再び現れる。

麻佑 あれ？ ママは？

信一 ん？ ああ、ママなら、魚とりに……。

麻佑 魚？！

信二 じゃ、麻佑ちゃん、勉強、がんばつて。

麻佑 え？ ああ……。

信二、去る。

信一 何？

麻佑 え？

信一 ママに何か、用か？

麻佑 ああ、いいよ。

信一 何だ？

麻佑 帰ってきたら、ママに言うから。
信一 今、パパに言えばよかんべ？
麻佑 いいって。
信一 なんで？
麻佑 パパに言ってもしようがないもん。
信一 んなこと、言ってみなけりや、わかんなかんべ？
麻佑 わかるよ。
信一 なんで？
麻佑 なんで、なんでって、うるっさいなあ！
信一 言ってみろって言ってるだよ。
麻佑 だから、いい、って言ってるの。
信一 言え！
麻佑 やだ！
信一 言え！
麻佑 やだ！

信一　なんで、いつも、おまえは、そうなんだ！？

麻佑　出た。パパの「なんで」。

信一　いいから、言ってみろ！

麻佑　お金、ちよーだい！

信一　あ？

麻佑　夏期講習のお金、明日、予備校に持ってかなくちやなんないのツ！

信一　……ママに言え。

麻佑　ほーら。だからさつきからそう言ってるに。(上手前へ去る)

信一、煙草の箱を手取る。

が、やはり空である。

ひねり潰して溜息をつく。

溶暗。

翌週。

午後。

扇風機が回っている。

蝉の声。

聡子 だけど、何も警察沙汰にすることないと思わない？ そんな、たかが子

供のイタズラに……。

由美子 ああ……。

聡子 買ったっていくらもするもんでもないんだに。

由美子 でも、どうして……？

聡子 お勝手口から祠を見張ってたんだって。暇なのよ、あのババア。

由美子 じゃなくて。

聡子 え？

由美子 盗んでどうするの？ そんな陶器のお稲荷さんなんて……。

聡子 ちよつとお！「盗む」だなんて、お義姉さんまで人聞きの悪いこと言わないでよ。うちの子はただ同級生の後にくっついてただけなんだに。

由美子 ああ……。

聡子 だいたい、その「同級生」ってのが、当の米屋の息子なのよ？

由美子 そうなの？

聡子 そうよ。あのババア、わざとコトを大きくしようとしてるんだに。そうやって孫のこと泳がせといて、あとで嫁にグチグチあてつけんのよ。躰がなつてないとか、なんとか。そんな嫁姑のイザコザに巻き込まれて、ある意味、あたしたちの方が被害者なワケ。

由美子 はあ……。

聡子 でもまあ、うちの子が「事件」にカンヨしてたのは事実なワケだし、とにかく、あたし、頭下げたのよ。壊した狐は弁償さしてもらいますって。

由美子 うん。

聡子 そしたら、あのババア、なんてったと思う？

由美子 なんて言ったの？

聡子 「なんでも金で済むと思うな」 って、エッラソーに……。

玄関のチャイムが鳴る。

由美子 あ。(振り返る)

聡子 (振り返る) ……。

由美子・聡子 鳴った！

聡子 よかったに。

由美子 うん。

聡子 こんなんで、下手に電気屋呼んだら、それだけでウン万だもん。うちな

んかこないだ冷蔵庫のガスが抜けて5万よ、5万！

由美子 そんなに？

聡子 そうよお。トンだ悪徳業者。消費税はおまけしますとか調子のいいこと

言つといて、ちゃっかり請求書に載ってるし。お義姉さんも気をつけた

方がいいわよ。

康裕、上手奥から工具を手に現れる。

康裕 どう？ 鳴った？

聡子 鳴った、鳴った。

康裕 (得意げに) な？

由美子 康裕さん、どうもありがとう。

康裕 やっぱ接触ですね、バネんところ。古くなると、どうしても。

由美子 そう。あ、康裕さん、座つて。今、お茶を……。

康裕 はい。(座り) ……じゃ、今度、聡子。

聡子 ん？

康裕 お前、押してきて。

聡子 は？ なんで？

康裕 俺、ここで聞いているから。

聡子 鳴ったって言うてるに。

康裕 鳴り具合を確かめないで。

聡子 何よ、鳴り具合って？

康裕 鳴ればいいってもんじゃないんだから。

聡子 鳴ればいいってもんでしよう？

康裕 わかってないなあ。

聡子 いいわよ、もう、鳴ったんだから。

康裕 いやいや、だからあ……。

由美子 あ、じゃ、あたし……。 (腰を上げる)

聡子 ああ、いい、いい、お義姉さんは座ってて。…… ったく、めんどくさい

人なんだから。 (立ち上がる)

康裕 強めにな。

聡子 何？

康裕 強めに。 (と、指で押すポーズ)

聡子 ……。

聡子、上手奥に去る。

由美子 どうぞ。(と、お茶を)
康裕 あ、どうも。(飲んで) あー、生き返る。

そこへ、野球帽をかぶった男・沼田が作業場から顔を出す。

沼田 シーンさん！

由美子 あら、沼田さん。

沼田 あ、どうも。シンさんは？

由美子 お父さん、今、ちよつと、お葬式に……。

沼田 葬式？

由美子 角の、クリーニング屋さん。

沼田 ご主人？

由美子 ええ。

沼田 そうですか、クリーニング屋のご主人、とうとう……。

由美子 どうぞ、上がってください。

沼田 あ、いやいや、あんまりゆつくりもしてらんないんで。この時期、エア

由美子 ああ。

沼田 今日もこの後、三軒だに、三軒。

聡子の声 鳴ったあ？

沼田 ？

聡子、戻ってくる。

聡子 (沼田を認め) あ……。

康裕 (聡子に) 強めにやった？

聡子 え？

康裕 強めに。
聡子 ああ、うん……。
康裕 おつかしいなあ。

康裕、上手奥に去る。

沼田 (聡子に) あ、どもども。
聡子 どうも……。
由美子 え？ 沼田さんと知り合い？
聡子 ん？ んん、まあ……。
沼田 (聡子に) どうです？ その後。
聡子 はい？
沼田 ガスガス、冷蔵庫。
聡子 ええ、おかげさまで……。
由美子 ……。

礼服姿の信一、作業場から現れる。

信一 たいま。

沼田 ども。

信一 ああ、沼ちゃん。

聡子 おかえり。

信一 おい、聡子、来てたのか。

由美子 あ、お父さん、ちよつと待つて。

信一 え？

由美子、下手奥に去る。

沼田 いやあ、参っっちゃいましたよ。

信一 どしたん？

沼田 さつき、ナベちゃんから電話、あつて。

信一 ナベから？

沼田 ええ。

信一 何？

沼田 今度の試合、出らんなくなったって。

信一 え？！ どうして？

沼田 急に転勤が決まったんですって。

信一 転勤？

沼田 ええ。これだからサラリーマンはなあ。

信一 じゃあ、うちのピッチャー、どうすんの？

沼田 だから、どうすんべって話をしに来たんすよ。シンさん、誰か知りませ

ん？

信一 急に言われても……。

由美子、塩を手に戻ってくる。それを信一に振りかける。

沼田のケータイが鳴る。

沼田

あ。ちよつと失礼。(出て) もしもし……。あ、どもども。ええ。今、向かってるところです。

信一、家にかかる。

沼田

いやあ、それが渋滞に巻き込まれちゃいまして。ええ。すいません。消費税は、おまけさしていたきますから。はい、はい、わかりましたあ。じゃ、後ほど。(と、切ろうとするが) ……はい? ……ええ……ああ……そうですか。はい。わかりました。じゃ、後ほ(ど) ……はい?

康裕、戻ってくる。

康裕 鳴った？

聡子 ううん。

康裕 おかしいなあ。あ、お義兄さん、おかえりなさい。(聡子に) お前、さ

つき変などこ押しちゃったんじゃないの？

ちちゃんと押すとこ押したわよ！

(電話に) はいはいはい。

信一 あ。そうだ、康裕くん。来月の第三日曜日って、暇？

康裕 はい？

信一 野球の試合。一人、欠員出ちゃってさ。

聡子 ダメよ！

信一 え？

聡子 団地のお祭りだに。

信一 ああ、そう……。

沼田 はい……はい……はい、はい。(と、急いで切る。ケータイをしまい)

……俺、もう、行かないと。すいませんけどシンさん、ちよっと心当た

り、声かけてみてくれませんか？ 俺も探してみますけど。

信一 うん。

沼田 じゃ、また、連絡しますから。奥さん、ども、おじゃましました。

由美子 おかまいもありませんで。

沼田、去る。

由美子 あ、お父さん、それ、着替えちやってください。(と、下手前へ去る)

信一 ああ……。

まもなく由美子、信一の着替えを持って戻ってくる。

由美子 お昼どうします？ お寿司でも取ります？

信一 ああ。(脱ぎながら、聡子に) いいか？ 寿司で。

聡子 いい、いい。それ(礼服を)、借りにきただけなんだに。

由美子 康裕さん、ちよつと着てみたら？ サイズ、大丈夫か、どうか。

康裕 ああ、はい。

由美子 こつちで。

康裕 どうも。

康裕、礼服を受け取り下手前へ去る。

由美子 じゃ、お寿司、電話してきますね。

信一 ああ。

聡子 いつも悪いわね。

由美子、去る。

聡子 どうすんの？

信一 何？

聡子 野球。

信一 ああ……。

聡子 信二兄さんに頼んでみる？

信一 ダメだ、あいつは。

聡子 どうして？

信一 あんなへボ、使い物になるわけなかんべ。

聡子 贅沢言ってる場合じゃないに。電話したげる。(ケータイを取り出す)

信一 いいって！

聡子、構わず電話する。

聡子 (ケータイを耳に当て) ……あれ？

信一 どした？

聡子 「現在使われておりません」て……。

信一 は？

聡子 おかしいわね。(もう一度かけて) ……。
信一 電話代、払ってねえのか？
聡子 だったら「お客様の都合により」だに。
信一 ああ……。
聡子 やっぱ、ダメだ。
信一 工場は？
聡子 ……。
信一 聡子、工場！
聡子 今、かけてるッ！ ……ダメだ、こつちもつながない。何か、あったのかしら？
信一 ……。
聡子 昌代さんの、番号、わかる？
信一 え？
聡子 昌代さんのケータイ！
信一 いや……。

聡子　なんで聞いとかないのよ？
信一　はあ、いいっ！　直接、行って見てくる。

信一、作業場から下手に去る。

聡子　あ、じゃ、あたしも……。　（靴がない）

聡子、一旦、上手奥へ去る。まもなく靴を手に戻ってくる。

聡子　ちよつと、兄さん、待ってよ！

聡子、作業場から下手に去る。
礼服に着替えた康裕、現れる。

康裕　ちよつと腕が……。あれ？　聡子？　聡子お？

康裕、上手奥に去る。

静寂。

蝉の声。

作業場上手から女、現れる。昌代である。

昌代　ごめんください……。ごめんください……。

康裕、戻ってくる。

康裕　あ……。昌代さん……？

昌代　……。どうも、ご無沙汰してます……。

康裕　どうも……。

由美子、戻ってくる。

由美子 (昌代を認め) あら。

昌代 あ、こんにちは……。

由美子 どのしたの？ そんなところから。

昌代 なんか、玄関のチャイム、鳴らないみたいで……。

由美子 ああ……。あ、どうぞ。散らかってるけど。

昌代 はい……。

昌代、誰かを探すふうに、家の中を見回している。

由美子 あれ？ (康裕に) お父さんたちは？

康裕 さあ。

昌代 やっぱり、来てませんよね？

由美子 え？

昌代 あの人……。

由美子・康裕 ……？

蝉の声、高鳴り、溶暗。

同日、夜。

ウシガエルの声。

座卓に信一、由美子、麻佑。

麻佑 えーっ！？　なんで、あたしの部屋なのよ？！

由美子 シッ！　声が大きいわよ。

麻佑 （声をひそめて）……………ここに布団敷いて寝てもらえばいいだけでしょ
う？

由美子 だから、麻佑ちゃんがここに寝てちょうだいって……………。

麻佑 だから、なんでよ？　あたし、受験生なんですけど？

信一 だからパパ、言ったんべ。わざわざ浪人なんかしねえで、どこでも、受
かったとこ行けって。

麻佑 やよ！　あんなどこ、滑り止めだに。

信一 滑り止まってねえから言ってるんだんべ！ 行く気がねえなら最初つか

ら受けんな。受験料だつてタダじゃねえんだぞ。

麻佑 受かってから気が変わったんですう。

信一 つまんねえ屁理屈べー（ばかり）、覚えて。

麻佑 だいいち通えないに。

信一 あ？

麻佑 車の免許もないのに。

信一 電車があるんべ。

麻佑 一時間に一本だに。

信一 だったら免許取ったらよかんべ。

麻佑 車がないに。

信一 パパのがあるんべ。

麻佑 軽トラだに！

信一 にーにーにーにー。だいたい女が浪人なんかしてつと、歳ばっかどつち

やうんだぞ。

麻佑 歳とるのに男も女も関係ないに。

信一 嫁のもらい手がなくなるつつつてんだよ。

麻佑 あたしまだ19よ？

信一 すぐだ、すぐ。いつまでも若いと思つたら、そんなのは……、あれだかんな。

麻佑 何よ？

信一 若いうちだけだかな。

麻佑 若いのが若いうちだけなのはアタリマエでしょ。

信一 黒岩のナツちゃん、見てみるつつてんだよ。おまえといっこしか違わな

いのに、じきにお母さんじゃねえか。

麻佑 ナツちゃん、ヤンキーだに。

由美子 ちよつとの間の辛抱じゃない。ね？

麻佑 「ちよつと」って、いつまでよ？

由美子 だから、信二おじちゃんが見つかるまで……。

麻佑 いつ、信二おじちゃん、見つかるのよ？

信一 いいから、つべこべ言わず、言われたとおりにしろ！
麻佑 ……。

昌代、パジャマ姿で現れる。

一同 ……。

昌代 お風呂、お先にいただきました。

由美子 パジャマ、きつくなかった？

昌代 ええ……。

由美子 そう。お父さん、お風呂は？

信一 ああ、あとでいい。

由美子 じゃ、麻佑ちゃん、入ってきちやいなさい。

麻佑 ……。(ぶすつとして立ち上がる)

昌代 あ、お湯、足さないと、ちよつと少ないかも……。

麻佑、無言で風呂場へ去る。

昌代 (それを見送り) ……。

由美子 昌代さん、今日、麻佑ちゃんの部屋で寝て。

昌代 え? ああ、はい……。

由美子 今、お布団、敷いてくるから。

昌代 あ、自分で……。

由美子 いいから、いいから。お父さんが話があるって。

昌代 ああ……。

由美子、上手前へ去る。

信一 ま、座んなよ。

昌代 はい……。 (座る)

やや間。

信一　なんか飲む？　ビールか、なんか。

昌代　あ、いえ、どうぞお構いなく……。

信一　飲めなか、なかんべ？

信一、ビールを取りに下手奥へ去る。

ウシガエルの声。

と、昌代のケータイが鳴る。

昌代

（出て）もしもし……あ、どうも、お世話になります。……いえいえ。うちは、何時でも、はい……。はい？　……あ、いえ、「次」ではなくて、「二」です。漢数字の「二」。……はい。あたしのほうは、あつてます、それで。……ええ、お手数ですけど、よろしく願います。はい、失礼します……。

昌代、電話を切る。

溜息をつき、ケータイをしまう。

信一、ビールとコップを持って戻ってくる。

信一　なんかツマミでもありやいいんだけど。

昌代　あ、いえ、ほんと、お構いなく……。

信一　ま、一杯。

昌代　あ、自分で……。

信一　いいからいいから。(注ぎながら)……大変だんべ。朝が早いし。新聞

昌代　配達なんて男だつてキツイ仕事だに。

信一　はあ……。あ、もう、それくらいで。

昌代　しかし驚いたよ。久しぶりに帰ってみたら、実家がなくなって更地にな

昌代　つてんだもん。狐につままれたような気がした。

昌代　……。

信一　　なんで、こうなる前に言わなかったん？

昌代　　……すいません。

信一　　……。ま、飲みなよ。

昌代　　はい……。(しかし手をつけない)

信一　　で、どっか心当たり、ないの？

昌代　　？

信一　　あいつの行きそうなところ。

昌代　　ああ……。

信一　　友達んところか、行きつけの飲み屋とか……。

昌代　　思いつくところは、一通り連絡してみたんですけど……。

信一　　女んところか。

昌代　　……。

信一　　いや、それは、ねえか。さすがに、それは、ねえな。

信一、茶箆筒の引き出しを開ける。

信一 あれ？ おかしいな……。
昌代 いただきます……。。

昌代、ビールを一息に飲み干す。

信一 いい飲みっぷりだねえ！ どう？ もう一杯。
昌代 あ、いえ、もう……。。
信一 まあまあ、そう言わず。

由美子、戻ってくる。

由美子 昌代さん、お布団、敷けたから。
昌代 あ、すいません。
信一 あ、由美子。

由美子 はい？

信一 そこにあった煙草、知らねえか？

由美子 捨てましたよ。

信一 は？

由美子 捨てました。

信一 なんで？！

由美子 禁煙するって言ってたでしょう？

信一 だからって捨てること、なかんべ？

由美子 だって、あれば吸っちゃうに。

信一 吸わねえよ。

由美子 吸いますよ。

信一 吸わねえって！

由美子 現に今、吸おうとしてたでしょう？

信一 してねえよ。確認しただけだよ。

由美子 何のために？

信一 何のつて、おまえ……。

由美子 あたし、数えてたんだから。一日、一本ずつ、減ってるの。

信一 は？ 減るわけなかんべ？

麻佑の声 ママあ！

由美子 ええ？

麻佑の声 シャンプー！

由美子 なあに？

麻佑の声 シャンプー、からっぽ！

昌代 あ。あたしが、最後……。

由美子 え？

昌代 さつき、言おうと思ってたんですけど……。

由美子 ああ。

昌代 ごめんなさい。

由美子 いいの、いいの。

麻佑の声 ママあ！

由美子 はいはい。

由美子、上手前に去る。

信一 ま、しばらく、ここにいなよ。やかましいのがいるけどさ。新聞屋の寮で、ひとりで信二の帰りを待つより、よかんべ？

昌代 ……すいません。

信一 はあ(もう)、「すいません」は、いいから。

昌代 あ、はい……。

信一 ちつと俺、煙草買ってくるわ。

信一、上手奥に去る。

昌代 ……。

由美子、戻ってくる。

由美子 あれ？ お父さんは？

昌代 あ、今、煙草、買いに……。

由美子 もう。やめるやめるって、口ばかりなんだから。……あら？ 昌代さん、それ……。 (と、ネックレスを)

昌代 ？

由美子 ちよつと、かして。

由美子、昌代のネックレスをはずす。

由美子 ……あー、引っ張っちゃったのね。絡まって玉んなってる。

昌代 ああ……。

由美子、ネックレスの玉を爪でほどこうとする。

昌代、その様子を見ている。

昌代 お義姉さん。

由美子 ん？

昌代 黒岩行きのバスって、どこから出てるか、わかります？

由美子 黒岩？

昌代 ええ。

由美子 黒岩なら駅のターミナル……。

昌代 ここ来る前に行ってみたんですけど……。

由美子 北口よ？

昌代 え？

由美子 駅の北口。「黒岩行き」。

昌代 ああ、北口……。

由美子 黒岩に、何か、あるの？

昌代 ちよっと、知り合いがいるもんですから。あの人のこと、何か知ってる

かもしれないし……。

由美子 そう。でも、あんまり本数ないわよ。バス。もしあれなら、お父さんに
言つて、車で……。

昌代 あ、いえ。途中でちよつと寄りたいたいところも、ありますから。

由美子 お父さんに言つて、寄つてもらえばいいに。

昌代 いえ、ほんとに。

由美子 そう？

昌代 はい。あの、それ、いいですよ？ あとであたし、やりますから。

由美子 いいわよ、乗るかかった船だもん。昌代さん、もう、休んだら？ 明日

も仕事、早いでしょ？

昌代 ああ。じゃあ、すいませんけど、お先に……。

由美子 寝苦しいようだったら、扇風機つけて。

昌代 はい。おやすみなさい。

由美子 おやすみなさい。

昌代、上手前に去る。
ややあつて信一、煙草を手に戻ってくる。

由美子 やめたんじゃないんですか？

信一 何？

由美子 煙草。

信一 ああ……。最後の一箱だよ。

由美子 増えてんじゃないですか。こないだ、最後の一本で言ってたのに。

信一 ……。何してんだ？

由美子 昌代さんのネックレス、絡まつてたから。

信一 ふうん。……昌代さんは？

由美子 寝ました。

信一 そう。

由美子 ずいぶん優しいんですね。

信一 え？

由美子 ビールなんか出しちゃって。

信一 え？

由美子 あたしには一度だつて、そんなことしてくれたこと、ないのに。

信一 ……。(自分のコップにビールを注ぎ) ほれ。

由美子 結構です。

信一 何だよ？！

由美子、ネックレスに戻る。

由美子 少し、痩せました？

信一 俺？

由美子 昌代さんですよ。

信一 ああ……。新聞屋に住み込みで働いてんだと。

由美子 聞きましたよ、さつき。

信一 あ、そう。

由美子 いたでしよ？ あたし。

信一 そうだっけ？

由美子 何、言ってんだか。

信一 ……。ちっと、かしてみ。

由美子 あ……。

信一、ネックレスを奪う。

信一 (ほどきにかかる) あー、引っ張っちゃったんだなあ。

由美子 ……ねえ、お父さん。

信一 ん？

由美子 お父さんは、黙って、いなくなったりしないでしょうね？

信一 んなわけ、なかんべ。

由美子 (微笑む)

信一 野球の試合があるんだに。

由美子 (微笑みは消え) ……。

信一 ああ、もう、なんだこれ。どうなってんだ？

由美子 やりますよ。

信一 いいよ。

由美子 やりますって。(手を伸ばす)

信一 (身体を捻り、渡さない)

由美子 ……。あ、そうだ。モチヅキさんに連絡してくれました？

信一 モチヅキ？

由美子 網戸の張り替え、見積ってくれって言われてたでしょう？

信一 ……ああ。

由美子 ファックスしてくださいよ。

信一 しとくよ。

由美子 今。

信一 え？

由美子 モチヅキさんの奥さん、気が短いんで有名なんだから。

信一 ……たく、しょうがねえな。

信一、ネックレスを置いて、下手奥に去る。

由美子 (それを手に取り) ……ああ、もう、余計こんがらがっちゃったに…。

ウシガエルの声。
溶暗。

翌朝。

隣室で掃除機をかける音。

麻佑が腹ばいでネックレスをほどこいている。
やがて掃除機の音がやむ。

蝉の声。

由美子が掃除機を引き摺って、下手前から現れる。

由美子 ほら、麻佑ちゃん！

麻佑 んん？

由美子 そんな恰好で。

麻佑 ん……。

由美子 ママがやるから。あんたは他にやること、あるでしょう？

麻佑 何？

由美子 何じやないに、浪人生が。

麻佑 予備校、休講だに。

由美子 あんたにはもう後がないのよ？ わかってんの？

麻佑 わかってる。

由美子 だったら何度も同じこと言わせんじやないの。

麻佑 言わなきやいいに。

由美子 麻佑ちゃん！

麻佑 もう、大きな声、出さないでよ。

麻佑、起き上がる。

麻佑 あ。(腕をバチンと叩く) …… (舌打ち) やられた。 …… ママ、ムヒある？

由美子 何？

麻佑 ムヒ。蚊に食われた。うー、かい…。

由美子
……。

由美子、茶箆筒の引き出しを開け、ムヒを取り出す。

由美子
ほら。

麻佑
サンキュ。

由美子
ねえ、麻佑ちゃん。

麻佑
（ムヒを塗りながら）ん？

由美子
麻佑ちゃんの礼服、買わないとね。

麻佑
礼服？

由美子
おばあちゃんの三回忌。もう高校生じゃないんだからセーラー服って

わけにいかないに。

麻佑
ああ。でも、どこで……？

由美子
そうねえ、駅前のデパートか……。

麻佑
じゃなくてえ。

由美子 いいのよ、吊しので。

麻佑 違う違う。あの家よ。

由美子 え？

麻佑 三回忌、どこでやんの？ おばあちゃん家。取り壊されちゃったに。

由美子 ああ……。そういうの全部、信二さんに任せっきりにしてたから……。

麻佑 更地でやんの？

由美子 え？

麻佑 青空三回忌。

由美子 まさか。昌代さんは、どう考えてるのかしら？

麻佑 今日、昌代おばちゃんは？

由美子 ん？

麻佑 朝刊の配達って、こんな時間までかかるもん？

由美子 今日は仕事の後、黒岩だつて。

麻佑 黒岩？

由美子 昔の知り合いがいるんだつて。信二さんのこと何か知ってるかもつて……

…。

麻佑 ふうん。

由美子 あ、そうそう、黒岩つていえば……。

由美子、茶箆筒から本を取り出す。

麻佑 ？

由美子 えーっと、麻佑ちゃんの総画は、っと……。

麻佑 ソーカク？

由美子 一生の全体運を表すの。

麻佑 占い？

由美子 占いじゃないに。レッキとした姓名判断。

麻佑 なんでもた、そんなもんにハマってんの？

由美子 ナツちゃんの赤ちゃんと何か、いい名前ないかって黒岩のおばちゃんに言われてんの。

麻佑 ああ……。で、あつたん？

由美子 それが、いざ探してみると、なかなかねえ。ちなみに麻佑ちゃんは……

(と、ページを捲る) これだ。「家族の愛情に恵まれて、おだやかな人生ですが、可もなく不可もない、単調な人生ともいえるでしょう」。

麻佑 可もなく不可もなくって……。ちよつと見して。(本を手に取り) 何、これ、違うに。

由美子 違わないわよ。有名な大学の先生が書いてるんだに。

麻佑 あたしの総画間違ってるに。

由美子 え？

麻佑 ママ、「口」を何画で数えてる？

由美子 クチ？

麻佑 麻佑の、「佑」の「口(ここんとこ)」。

由美子 (指で宙に書いて) 1・2・3・4……。

麻佑 やっぱりね。カドは、これ()で、一画よ？

由美子 そうなの？

麻佑 そうよ。

由美子 さすが。ダテに二年も受験生してないわね。

麻佑 ……。

由美子 じゃ、一画少ないのね。(ページを捲る) こっちだ。「負けず嫌いの性格で社会的成功を収めます」。

麻佑 おお！

由美子 「しかしその性格が災いし、晩年はひどい孤独を味わうことになるでしょう」。

麻佑 ……。

信一、作業場から現れる。

由美子 あら、お父さん、ずいぶん早かったのね。もう作業、済んだんですか？

信一 モチヅキさんの奥さん、ほんと短気だな！

由美子 でしたんです？

信一 網戸、はあ、いいってさ。

由美子 え？

信一 ホームセンターに頼んだからって。

由美子 ええ？！

麻佑 納期、守らないからだに。

信一 あ？

麻佑 何でもない。

信一 あ、そうだ、麻佑。今朝、おまえに電話あったぞ。

麻佑 (本に目を落としたまま) 誰？

信一 オクデラって。

麻佑 オクデラ？

信一 高校の同級生だって。

麻佑 ああ、キョーコ。何て？

信一 大学、夏休みで、こっちに帰ってきてんだと。

麻佑 へえ……。

信一 東京に戻る前に会いたいから、連絡、欲しいって。

麻佑 あ、そう……。(ページを捲る)

信一 一応、ケータイの番号、教えといたから。

麻佑 (顔を上げ) ええっ?! なんて、そーゆー余計なこと、すんのよ?!

信一 え?

麻佑 ほんつと、デリカシーってもんがないんだから!

信一 何だよ? デリカシーって。

麻佑 わかんないなら、辞書ひいて! (と、立ち上がる)

信一 ……。

由美子 出かけるの?

麻佑 図書館ッ。

麻佑、上手奥に去る。

信一 なんだ? あいつ……。

信一、煙草を取り出す。

由美子、灰皿を持ってくる。

由美子 東京の大学だったんですね。

信一 ん？

由美子 キョーコちゃん。

信一 ああ。

由美子 お茶は？

信一 ん。

信一、煙草に火をつける。

由美子、お茶をいれる。

由美子 はい。(湯飲み茶碗を置く)

信一　ん……。

由美子　そうだ。お義母さんの三回忌ですけど……。

信一　ん？

由美子　どうします？

信一　どうって、やるにきまつてるんべ？

由美子　やるのはわかってますよ。場所。どつか、借ります？

信一　ああ……。まあ、ここでよかんべ。

由美子　ここで？

信一　どうせ身内だけなんだに。

由美子　そうですか。

信一、新聞をひろげる。

由美子　……あ！　お父さん、ちよつと、それ、見して。

信一　ん？

由美子 そのチラシ。

信一 これ？

由美子 玉子、ワンパック80円だって！

信一 隣のスーパーだぞ？

由美子 (ひったくり) 一円でも節約しないと。ナツちゃんの出産祝いもあるし、麻佑ちゃん、大学行くようだったら、仕送りだってしないといけないし……。

信一 だから、うちから通えるところ行けつつってんだに。

由美子 昌代さんに少し、入れてもらうことできないかしら？

信一 え？

由美子 一人増えればそれだけシャンプーの減りだって早くなるんだし……。

信一 セコイこと言うなよ。そんな、シャンプーぐらいで……。

由美子 たとえばですよ。食費もかさむし、うちだってラクじゃないって言うてんです。

信一 ……。

由美子 (広告に目を落とす) ウソ!? タイムセールで牛乳88円!

信一 おまえ牛乳くらいは近くで買えよ。この暑さで腐るぞ。

由美子 うちも少し、商売のやり方、考えないと。

信一 やり方って?

由美子 もっと、今の時代に合ったガラス屋にしていかないと。

信一 今の時代に合ったって、どんな?

由美子 それはお父さんが考えてくださいよ。

信一 下手に商売の手ひろげて、信二んとこみたいになったら元も子もなかなべ?

由美子 そりゃ、そうですけど……。

信一 あいつも大人しく今までどおり、工場で旋盤回してりやよかつたんだに。

へんに色気出して、慣れないことに手え出すから……。

由美子 じゃあ、どうすんです? 年々、ガラスの注文、減ってんですよ?

信一 ……知ってるよ。

由美子 だったら何か考えてくださいよ。

信一 考えてるよ！

由美子 たとえば？

信一 え？

由美子 たとえば、どんなこと考えてるんです？

信一 たとえば……。

由美子 夜中に、そこいらの家の窓ガラス、たたき割ってまわるとか？

信一 バカ言うな。

由美子 じゃあ、あたしが外に働きに出ます。

信一 おまえが？

由美子 ええ。

信一 どこへ？

由美子 どっか。

信一 おまえにできる仕事なんて、あるわけなかんべ？

由美子 探せば何か、ありますよ。

信一 うちの仕事はどうすんだよ？

由美子　じゃあ、どうするんです？

信一　そんな容易（よい）じゃねえのか（たいへんなのか）？

由美子　だから、さつきからそう言ってるんじゃないですか。

信一　わかったよ。（煙草を灰皿にもみ消す）……煙草、やめる。
由美子　聞き飽きました。

由美子、掃除機を持って去る。

やがて奥で掃除機の音がする。

溶暗。

同日、深夜。

ウシガエルの声。

扇風機が回っている。

パジャマ姿の麻佑が座卓で問題集をひろげている。
やがてパジャマ姿の昌代、上手前から現れる

昌代
まだ、やってたの？

麻佑
ん？ ああ……。

昌代
たいへんね。

麻佑
どしたん？

昌代
ちよつと、寝つかれなくて……。

そう。……んんっ。(伸びをする) 何か飲む？ コーヒーでも……あ、

余計、眠れなくなっちゃうか。

昌代 いいわよ。邪魔しちや悪い。
麻佑 ちよっと休憩。冷蔵庫にジュース、あるけど？
昌代 ああ、じゃあ。

麻佑、去る。

昌代、問題集をのぞき込む。
やがて麻佑、両手に缶ジュースを持って戻ってくる。

麻佑 どっち？

昌代 え？ あ……じゃ、こっち。

麻佑 はい。(一本渡す)

昌代 ありがと。……どう？

麻佑 ん？

昌代 勉強、はかどってる？

麻佑 ああ、まあ、隔靴搔痒(かつかそうよう)って感じ。

昌代 カツカ？

麻佑 思うようにならなくて、もどかしいってこと。(ジュースの蓋を開ける)

昌代 ……ごめんなさいね。麻佑ちゃんのお部屋、占領しちゃって……。

麻佑 ああ、いや、べつに、そういう意味で言ったんじゃないから。

昌代 でも、なんで？

麻佑 え？

昌代 自分から、大学蹴っちゃったんでしょ？

麻佑 ああ、まあね。

昌代 せっかく受かったのに、もったいない。

麻佑 みんな同じこと言うのね。

昌代 ……。問題、出したげる。

麻佑 え？

昌代 まずは……へめつたに巡りあえない良い機会。

麻佑 ……【千載一遇】。

昌代 ピンポーン。じゃあ、(物事は永遠に同じことのくり返しであること)。

麻佑

【永劫回帰】

昌代

すごーい。じゃあ、〈新しいことを進めるにも過去を充分学ぶことから知恵を得ようということ〉

麻佑

【温故知新（おんこちしん）】

昌代

〈偏見がなく、心を開いていること〉

麻佑

【虚心坦懐（きよしんたんかい）】

昌代

〈繁栄がいつまでも続くことはなく、いずれは衰えること〉

麻佑

【栄枯盛衰（えいこせいすい）】

昌代

〈過ちに気づくとすぐに改め、自らを向上させるということ。または、まるで節操がなく、主張や態度がころころと変わること〉

麻佑

【君子豹変（くんしひょうへん）】

昌代

完璧！

麻佑

へへ。(得意げ)

昌代

じゃあねえ、次はちよっと難しいわよ。〈事に臨んで疑いたためらって決心のつかないさま〉

麻佑 え、何？

昌代 〈疑いためらって、決心のつかないさま〉

麻佑 ……。わかんない。何？

昌代 正解は【狐疑逡巡（こぎしゅんじゅん）】

麻佑 コギ……？（問題集を覗き込み）こんなん、わかりっこないに
でも載ってるわよ。

昌代 ああ、へこむ。ちよつと、一服さしてもーらおつと。

麻佑、茶箆筒の引き出しを開け、煙草を取り出す。

昌代 麻佑ちゃん、煙草なんか吸うの？！

麻佑 一日一本だけね、パパのを。吸う？（勧める）

昌代 ううん。

麻佑 そう。

麻佑、煙草に火をつける。口をとがらせて、肺に入れずに煙を吐く。

麻佑 ふう……。けっこうストレス溜まんのよ、二年も受験生なんか、やつてると。

昌代 ……。

麻佑 で、何か収穫あった？

昌代 え？

麻佑 信二おじちゃんのこと。そのこと聞きに、今日、黒岩まで行ったんでしょ？

昌代 ああ……。うん、とくに、何も……。

麻佑 そう。どこで何してんだろ、信二おじちゃん。

昌代 ……。

麻佑 いつ、いなくなっただん？

昌代 先週の日曜日。朝刊配りに行ったきり……。

麻佑 オトカに連れてかれちゃったのかなあ？

昌代
オトカ？

麻佑 狐のこと。「御稻荷」って書いて（と、煙草で宙に書く）、お、とう、か
……で、オトカ。子供が悪さしたときなんか親が言うのよ。「オトカ
に連れて行かれるわよ」って。

昌代
へえ……

麻佑 北海道で言わない？

昌代 はじめて聞いた。

麻佑 じゃあ、ここいらだけなんだ。

と、信一の声。

信一 （声）なんだ、麻佑、まだ起きてんのか。

麻佑 あ……。

麻佑、あわてて灰皿に煙草をもみ消し、問題集を解いているふり。

信一、下手奥から現れる。眩しげに目を細める。

信一 あ、昌代さん……。

昌代 どうも……。

信一 ……ん?! (煙い)

麻佑 ……。

昌代 あ……。

昌代、吸い殻を指に挟み、ポーズを取る。

昌代 ちよつと、一服……。

信一 ……ああ……。(麻佑に) いい加減にして、早く寝ろよ。

麻佑 ほーい。

信一、去る。

麻佑 ナイスフォロー。

昌代 ……。(吸い殻を灰皿に戻す)

麻佑 (ジュースを) 飲まないの？

昌代 ああ、ん……。

麻佑 つかぬことを訊いていい？

昌代 何？

麻佑 昌代おばちゃんと信二おじちゃんて、どこで知り合ったん？

昌代 ああ。専門学校が一緒だったのよ。

麻佑 東京？

昌代 そう。

麻佑 やっぱ東京かあ……。

昌代 どうして？

麻佑 これ、昌代おばちゃんに言ったことあったっけ？

昌代 え？

麻佑 あたしの初恋の人、信二おじちゃんなんだよ。

昌代 え？

麻佑 子供の時、よくデートしたの。信二おじちゃんが仕事でこっち来たときなんか。「お馬さん見に連れてったげる」って。競馬なんだけどね。
昌代 ああ……。

麻佑 で、帰りにいつも、デパートの食堂でナポリタンごちそうしてくれんの。競馬に勝ったときはクリームソーダも。

昌代 (軽く笑い) そうだったの……。
麻佑 だから、あたしの初恋はケチャップ味なんだ。ハハハ……。

昌代、静かに涙を流す。

麻佑 ……昌代おばちゃん……？

昌代 (涙を拭い) ……やだ。すっかり、お勉強の邪魔しちゃった。ジュース、ごちそうさま。

麻佑 あ、うん……。

昌代 これは、おばちゃんが預かっとくね。(と、煙草の箱を取る)

麻佑 えっ？

昌代 じゃ、がんばって、ほどほどに。

麻佑 ああ……。

昌代 おやすみなさい。

麻佑 うん、おやすみなさい……。

昌代、ジュースと煙草を持って上手前に去る。

麻佑 (それを見送り) ……。さて、と。(問題集に戻る)

ウシガエルの声。
溶暗。

翌週。

座卓に料理の皿とビール瓶。
礼服装姿の聡子がソファに座り、脚をさすっている。

聡子
あ、タタタ……。

麻佑、礼服装姿で現れる。

麻佑
……何してんの？

聡子
帰った？

麻佑
え？

聡子
坊さん。

麻佑
ああ、今、まだ玄関で……。

聡子 ほんつと、好きねえ。あ、タタタタ……。
麻佑 どしたん？
聡子 坊さんの法話。長すぎんのよ。うー……。
麻佑 ……。あ、これか。

麻佑、茶箆筒の上に置かれた封筒を手取る。

麻佑 そうだ。聡子おばちゃん。これ、なんだか知ってる？
聡子 ん？

麻佑、ケータイを出す。

麻佑 これ。
聡子 (手を止め) 何？
麻佑 ちよっとピントが、あれだけど……。

聡子 (ケータイの画面を覗き込み) ……何よ、これ？ 墓石？

麻佑 うん。墓地でお経あげてるとき、ちよつと気になって。

聡子 気になるって、何が？

麻佑 ここ。

聡子 心霊写真？！ やめてよお！ あたし、そういうのダメなんだに。

麻佑 いやいや、そうじゃなくて。おじいちゃんの名前の隣。「薫」って彫っ

てあるに？

聡子 カオル？

麻佑 ほら、ここ。戒名に「少女(がいじよ)」ってあるから、女ね。

聡子 (目を細め) ……ちよつと貸して。(と、ケータイを奪う)

麻佑 ね？

聡子 うん……。

麻佑 そんな大昔の人じゃないのに、誰だろうと思って……。

信一、現れる。ポロシヤツ姿である。

信一 麻佑！

麻佑 おー、びっくりしたあ。

信一 何してんだよ。御車代は！？

麻佑 あ……。そうだった。

信一 早く渡してやんねえと、坊さん、一生しゃべり続けるぞ！

麻佑、去る。

信一 結局、来なかったじゃないか、康裕くん。

聡子 ……兄さん。

信一 ん？

聡子 これ、知ってる？

信一 何？

聡子 薰って。

信一 カオル？

聡子 (ケータイの画面を見せ) ほら、ここ。

信一 え？

聡子 四歳で死んでんの。アカの他人が、うちのお墓に入ってるわけないに？

信一 ……誰？

聡子 あたしが聞いてるんだに！

信一 ……。

康裕 (声) お義兄さん。

信一 え？

作業場の上手から康裕、礼服姿で駆けてくる。

その手には、クリーニング屋のビニールがかかった礼服。

康裕 お義兄さん、すいません、遅くなりました。これ。お借りしてた礼服です。

信一 ああ……。

康裕 いやあ、参っちゃいましたよ。角のクリーニング屋、今朝の仕上がりっ

ていったんですよ。それが納期、守らないもんだから。最近、主人が死

信一 んだとかなんとかいって、もう……。

康裕 クリーニングなんかしてくれなくていいんだよ。

信一 いやいや、そういうわけにいきませんよ。

康裕 今さら……。

信一 はい？

信一、礼服を持って下手前に去る。

聡子、ケータイを手に考え事をしている。

康裕 ……何してんの？

聡子 女孩……。

康裕 ガイジヨ？

聡子　もしかしたら、あたし、妹がいたかも……。
康裕　は？

由美子、麻佑、昌代、談笑しながら現れる。

昌代　……またまたあ。

麻佑　マジでマジで。

昌代　麻佑ちゃん、大袈裟に言ってるでしょ？

麻佑　マジでピヨーンて一本だけ、後頭部のホクロから飛び出てたんだに。

由美子　あら、康裕さん。

康裕　どうも。

由美子　遅いから心配してたのよ。

康裕　すいません。

麻佑　ねえ、ママ？

由美子　え？

麻佑 お坊さん。ママも見たでしょ？ ピョ〜ンて。
由美子 知らないわよ。
麻佑 嘘。必死で笑い、堪えてたに。
由美子 いいから、空いたお皿、片づけちゃって。
麻佑 ほーい。
昌代 あ、こつち、あたし、やるわよ。
麻佑 うん。
由美子 あら。昌代さん、それ、どこで引っ掛けたの？
昌代 え？
由美子 ストッキング。伝線してる。
昌代 あ……。 (と、ふくらはぎを)
由美子 上で、着替えて着ちやったら？
昌代 ああ、はい……。じゃ、麻佑ちゃん、ごめん。 (と、皿を)
麻佑 うん。 (受け取る)

昌代、上手前へ去る。

麻佑、皿を持って下手奥に去る。

信一、礼服に着替えて下手前から出てくる。

由美子 あら。お父さん、今さら着替えたんですか？

信一 しょうがなかんべ。今さら届いたんだに。

由美子 お父さんはビール？ それとも、お酒にします？

信一 はあ、ビールはいいよ。

由美子 じゃ、お酒ね。康裕さんは？

康裕 あ、じゃ、僕も、お酒で……。

由美子、食器などを持って去る。

康裕 聡子。

聡子 ん？

康裕 おまえも、ちったあ、動けよ。
聡子 ……はいはい。あ、タタタ……。

聡子、しびれた足を引きずり、去る。

康裕 ところでお義兄さん、野球、どうなりました？

信一 ん？

康裕 こないだいったピッチャー、見つかりました？

信一 ああ、いや。

康裕 そうですか。

信一 なんです？

康裕 はい？

信一 やりたいの？

康裕 いやいや、僕は。子供の頃から野球ってダメなんですよ。

信一 なんです？

康裕 恐いんです。

信一 恐い？

康裕 ボールがどっち転がるか、予測つかないの。悪い方、悪い方に想像しち

やつて、動けなくなっちゃうんですよね。

信一 ふうん……。

間。

康裕 その後、信二さんから、連絡ありました？

信一 いや。

康裕 警察には？

信一 とっくに届けたよ。けど、何も。

康裕 そうですか……。どうしよつかない……？

信一 何？

康裕 や、実をいうと、前に一度、うちの会社に訪ねてきたこと、あるんです

よ。

信一 え、信二が？

康裕 ええ。あ、もちろん、失踪する前の話ですけど。工場が倒産する前の…。

信一 なんて？

康裕 はい？

信一 なんて信二が、康裕くんの会社に？

康裕 ああ。いくらか貸してくれないかって。

信一 ……。

康裕 どうせまた競馬か競輪かだろうと思って、断っちゃったんですけど。工場がそういうことになってるなんて知らなくて。

信一 ……そりゃ、すまないことしたね。

康裕 あ、いえ、僕の方こそ今頃になってこんなこと。内緒にするようにって、信二さんに言われてたもんで。

信一 そう……。

麻佑、お盆に酒を持って現れる。

康裕

あ、麻佑ちゃん、ありがと。(と、お盆を受け取る) いいよ、あと、こ
つちでやるから。

信一、お猪口を取り、

信一

康裕くん。

康裕

ああ、すいません。

信一、康裕に酒を注ぐ。

麻佑、去りかけるが、

信一

麻佑。

麻佑 え？

信一 おまえも一杯やれ。

麻佑 ……あたし、未成年なんですけど？

信一 いいんだよ、供養なんだから。ほれ。

麻佑 ……。

麻佑、お猪口を受け取る。

信一、麻佑に酒を注ぐ。

康裕 あ、じゃ、お義兄さん。(と、徳利を持つ)

信一 ん……。 (お猪口を手にする)

康裕、信一に酒を注ぐ。

康裕 じゃ、お義兄さん。どうぞ。

信一 え？

康裕 ひとこと。

信一 ……「乾杯」、でいいのか？ こういう場合。

麻佑・康裕 ……。

信一 麻佑。

麻佑 なんであたしに聞くん？ 知るわけないに。

信一 高い授業料払って夏期講習に行かせてんだに。

麻佑 夏期講習を何だと思ってるん？

康裕 ま、いいんじゃないですか？ 乾杯で。腹に入れば一緒ですよ。

信一 ……俺、ときどき康裕くんのが、わかんないよ。

康裕 またまたそんな。長いつき合いじゃないですか。じゃ、乾杯！（飲みかけて）……あれ？ 飲まないんですか？

信一、麻佑、口々に「乾杯」を言い、酒を飲む。

麻佑 ……。(一息に飲み干し) あふうー。五臓六腑に染み渡るう。
信一・康裕 ……。

麻佑、手酌で酒を注いでまた飲む。

麻佑 ういいい。

信一 おい、麻佑。

麻佑、更に注ごうとする。

信一 おい！ もう、よせ。

麻佑 なんで？

信一 なんで、じゃない。未成年だんべ？

麻佑 だって、供養だに……。

電話が鳴る。

由美子の声 麻佑ちゃん。ちよつと電話、出てえ。
麻佑 ほーい。

麻佑、上機嫌で去る。

信一 たく、誰に似たんだか……。

昌代、ストッキングを穿きかえて戻ってくる。

康裕 あ、昌代さん。

昌代 はい。

康裕 昌代さんも、どうです？ 一杯。

昌代 あ、いえ、あたしは……。

康裕 まあ、そう言わず。供養だに。(信一に) ですよね？

信一 ああ。

昌代 じゃあ、一杯だけ。

信一 お猪口、茶筭筍。

昌代 あ、はい。

昌代、茶筭筍からお猪口を出す。

康裕 どうぞ。

昌代 どうも。

康裕、昌代に酒を注ぐ。

そこへ、麻佑、駆け戻ってきた。

麻佑 あ、昌代おばちゃん。見つかった！

昌代
麻佑
昌代

え？

信二おじちゃん。なんか大怪我してるみたい。

……。

ヒグラシの声。
溶暗。

数日後。

ヒグラシの声。

競争馬の駆ける音……と思われたのは、聡子が苛立たしげに指先で座卓を叩いているのだった。

聡子

(叩きながら時計を見る) ……。

由美子、冷たいお茶を持って現れる。

そのとき聡子、突然、バンツと手のひらで座卓を叩く。

聡子

遅いッ!

由美子

(びくつとして) えっ?

聡子

あ、ごめんごめん。兄さんたち。

由美子 ……ああ……。

聡子 ったく、何、チンラタやってんのかしら。(また指先で座卓を叩く)

由美子 ……聡子さん、お茶。(コップを置く)

聡子 ありがと。(一気に飲み干す) ……あー。遅い！

由美子 聡子さんて、地運、17？

聡子 チウン？

由美子 生来の気質や体質を表すの。

聡子 は？

由美子 (茶筭筒から姓名判断の本を取り出す) 17は……、独立運。(読んで)

「活発で闘争心旺盛な性格です。ときには自制することも忘れずに」。

聡子 何、それ？ 占い？

由美子 姓名判断。すつごい、当たるのよ。

聡子 ……またあ。

由美子 ほんとよ。ちなみに信二さんは……(読んで)「金銭感覚に問題があり

聡子　　ます。新しい事業に手を出すと必ず失敗します」。ちよつと、いい？（本を奪い、ページに目を落とす）

と、玄関のチャイムが鳴る。

由美子　あ。帰ってきたかな？

由美子、上手奥に去る。

聡子　　（本から顔を上げ）……。
由美子（声）　おかえりなさい。

由美子に続き、信二、昌代、現れる。
信二は頭に包帯を巻き、松葉杖をついている。

聡子 何やってんのよ!?

信二 あ痛ッ……。 (頭を押さえる)

昌代 あなた……。

由美子 聡子さん。(本を手に取り)「自制することも忘れずに」。
聡子 ……。

信一、作業場から現れる。

信一 何してんだよ?

信二 え?

信一 んなどこ突っ立ってないで座れよ。

信二 ああ……。

由美子 昌代さんも、座って。

昌代 はい……。

由美子 お茶を……。

由美子、下手奥に去る。
信二、昌代、座卓の前に座る。

聡子 どういうことなん？

信二 どうって？

聡子 なんで競売なんてことになってんのよ？ ちゃんと説明してよ。

昌代 えっと、それは……。

聡子 お義姉さんは黙ってて。あたしは兄さんに聞いてんのッ！

昌代 ……。

聡子 なんで、あたしたち兄妹に一言の相談もないわけ？ ねえ？

信二 ……。

聡子 黙ってないで何とか言いなさいよ！

信二 相談、したさ。

聡子 されてないわよ！

信二　しようど、したさ。

聡子　しようとした、じゃしようがないに！

信二　じゃ、したら、なんとかなったのかよ？

聡子　そんなの、してみなきやわかんないに。

信二　5千万もの金が？

聡子　ごせ……？！

昌代　あなた。(信二に耳打ち) ……。

信二　……おう。(聡子に) 5千、2百万！

聡子　この際、端数は、どうでもいいわよ！

由美子、戻ってくる。

由美子　どうぞ……。 (コップを置く)

信二　……どうも。

昌代　……すいません。

由美子 だけど、ひどいことするわねえ、最近の中学生は。

聡子 やられる方が悪いのよ。

由美子 え？

聡子 バチが当たったのよ。

信一 おい、聡子。

聡子 だってそうだに？ お布施は競馬でスツチャうわ、実家は人手に渡って

取り壊されるわ、挙げ句に浮浪者みたく公園で寝泊りなんかしてんだもん。お母さんの三回忌にも顔出さないで……。」「この親不孝もんが」つて、お母さんが、あの世からゲンコくれたのよ。

……。

信二 まったく、これが血を分けた実の兄かと思うと、情ないったら……。

聡子！ 言い過ぎだぞ。

信二 全部ホントのことだに。

聡子 (ぼそっと) 競馬じゃねえし。

聡子 何？

信二 競輪だし。

聡子 んなこた、どっちだっついていいわよ！ お義姉さんも、お義姉さんよ？

昌代 え？

聡子 信二兄さん、こういう人だっつてハナからわかりきってるんだから、ちやんと手綱を握ってないと！

昌代 ……すいません。

信一 聡子、もう、いい加減にしろ！

聡子 信一兄さん、どっちの味方なのよ？

信一 敵とか味方とか、そういう話じゃなかんべ？

由美子 でも、とにかく無事で良かったわよ。

聡子 ちつとも「無事」じゃないに。大怪我だに。

由美子 そうだけど……。

やや間。

信一　で、これから、どうすんだ？

信二　ん？

信一　戻るのか？　例の、新聞屋に。

信二　あ、いや……。

聡子　戻れっこないわよね？　売り物の新聞にくるまって公園なんかで寝てたんだもん。

信二　……。

聡子　そもそもとまるワケがないのよ。ひとに使われるって経験がないんだに。信二兄さんにしろ、信一兄さんにしろ。

信一　なんでそこで俺が出てくるんだよ？

不意に信二、立ち上がる。

聡子　どこ行くん？

信二　いちいち……。

聡子 まだ話の途中だに？

信二 便所だよ。

聡子 え？

信二 ベンジョ！

信二、松葉杖をついて上手前に去る。

聡子 ……つたく。

と、昌代、いきなり土下座する。

昌代 ほんと、すいませんでした。

聡子 ちよ、ちよつと、お義姉さん、よしてよ……。それじゃ、なんか、あたしが、悪者みたいだに。

信一 昌代さん。

昌代 ……（顔を上げる）

聡子 ……。（時計に目をやり）やだ、もうこんな時間。あたし、行かなきゃ。

信一 何か、あるのか？

聡子 団地のお祭りで焼きそば焼かなきゃなんないの。

信一 ああ。

聡子 理事会。今年、副理事長なのよ。

信一 ああ。

聡子 また、顔出すわよ。しばらくは信二兄さんも、ここにすることになるん

信一 でしょ？

信一 まあな。車で送ってぐんべつか？（行こうか？）

聡子 いい、いい。

信一 遠慮すんなよ。

聡子 信一兄さんの運転、酔うんだもん。

信一 ……。

聡子 （昌代に）じゃ、お義姉さん、また。

昌代 ……ご迷惑おかけしました。

由美子 気をつけて帰ってね。

聡子 うん。

聡子、上手奥に去る。

と、信二、戻ってくる。

信二 (そろりと顔を出し) 帰った？

由美子、座卓の上を片づけはじめる。

昌代 あ、あたし、やります。

由美子 そ？ じゃ、これ、台所をお願い。

昌代 はい。

昌代、コップなどを持って下手奥に去る。

由美子 さて、と。信二さん。

信二 はい。

由美子 晩ご飯、何か食べたいもの、ある？

信二 あ、いや、とくに……。

由美子 お父さんは？

信一 何でもいいよ。

由美子 何でもいってのが一番困るのに……。

由美子、下手奥に去る。

信一 手、洗ったか？

信二 え？

信一 便所。

信二 ああ。大丈夫だよ。

信一 何だよ、大丈夫って？

信二 ガキじゃないんだに。

信一 ガキみたいなんだんべ。

信二 ……。

信二、座卓の前に座る。

信二 兄貴、覚えてる？

信一 ん？

信二 実家の庭に井戸があつたの、覚えてる？

信一 井戸？

信二 あつたに。工場、建てるんで潰しちやっただけど。地球の裏側まで続いてるって、兄貴、言ったんだよ。俺、信じてさ。

信一 ああ……。なんだよ、急に、そんな話。

信二 妙な噂、聞きつけたもんだからさ。

信一 噂？

信二 うん。競売の執行官が近所の年寄りに聞き込みしたんだと。

信一 噂って、どんな？

信二 昔、女の子が死んだんだって。その井戸で。

信一 え？

信二 そんな噂に尾鰭がついて不動産の価格に影響すんだよ。とくにこんな田舎じゃ人の出入りもないし。呪いだよ、呪い。

信一 誰だよ？

信二 え？

信一 その女の子って？

信二 そこまで俺は知らねえよ。だいたいホントの話かどうかも怪しいし。

……。

そのとき、作業場からポロシヤツ姿の沼田が現れる。

沼田 シーンさん。
信一 あ、沼ちゃん。
沼田 あ……。お客さん？
信一 や。弟。
沼田 ああ、弟さん。どもども。
信二 どうも。
信一 もう、そんな時間？
沼田 少し早いけど、道が混まないうちに。
信二 何、出かけるの？
信一 ナベの送別会。
信二 ナベ？
信一 野球チームのピッチャー。
信二 ピッチャーのこと、ナベっていうんだ？
沼田 やだなあ。「渡辺」のニックネームっすよ。

信二 ああ……。
信一 そうだ。おまえ、今度の日曜、暇か？
信二 えっ？
信一 暇だんべ？
信二 そりゃ、まあ、暇っていえば、暇だけど……。
信一 試合、出る。
信二 試合？
信一 野球の試合。ナベの代わりがいねんだよ。
信二 いやいや、俺、今日、退院してきたばっかだに。
信一 リハビリだ、リハビリ。
信二 ……。
信一 沼ちゃん、いた。
沼田 やー、よかった。一時はどうなることかと。灯台下暗しつすなあ。
信二 でも俺、野球なんて小学校以来やったことねえし……。
信一 いいんだよ、頭数だけ揃えば。あとはこっちでなんとかするから。

沼田 ひとつ、よろしくお願ひします。

信二 はあ……。

沼田 じゃ、シンさん、行きましょう。

信一 おう。

沼田と信一、談笑しながら作業場から去る。

ヒグラシの声。

信二、立ちがある。松葉杖をバットに見立て、かまえてみる。

そこへ、昌代、戻ってくる。

昌代 ……何してんの？

信二 え？ あ、や……。

信二、座卓の前に座る。

昌代、ソファに座る。

昌代 今度の日曜、二人で事務所に来るようになって。
信二 事務所？
昌代 弁護士の先生。
信二 ああ……あ、日曜、ダメだ。
昌代 え？
信二 野球の試合。
昌代 野球？
信二 兄貴に頼まれちゃってさ。人数、足りないんだと。
昌代 怪我人じゃない。
信二 リハビリだつて。
昌代 ……すぐまたそうやって後先考えず引き受ける。
信二 しょうがなかんべ。居候の身なんだに。
昌代 どうなつたつて知らないから。
信二 べつに、どうもなりやしねえよ。

信二、煙草に火をつける。

信二 灰皿、なかったか？

昌代 いつもそう。

信二 え？

昌代 火をつけてから、灰皿、探す。

信二 ……。

昌代、茶箆筒の上から灰皿を取って、信二の前に置く。

昌代 女んところじゃなかったのね。

信二 え？

昌代 黒岩の……。

信二 ……おまえ、まだ、そんなこと……？ とつくの昔に終わったことだん

べ？

昌代 もう、二歳だって。早いわね。

信二 ……。

昌代 鼻の形が、あなたそっくり。

信二 え、行ったのか？！ あいつんとこに。

昌代 行ったわ。

信二 なんで……？

昌代 あたしが行きたくて行ったと思う？

信二 ……。

昌代 あたし、道に迷っちゃった。ほんとは広い表通りに行くつもりだったのに。住宅地の路地の角を曲がったところで、あの子にばったり逢って……。

信二 え？

昌代 だけど違ったの。あの子じゃなかった。だって歳が違うもの。蠟石で道に絵を描いてたの。「これは何？」って訊いたら、何も言わずに走って

信二

逃げてった。きっと叱られたと思ったのね。

……。

昌代

どうするの？　これから。

信二

何が？

昌代

あたしたち、これから、どうしたらいい？

信二

どうって、しばらく、ここで厄介になるしかなかんべ。

昌代

その後は？

信二

その後は……まあ、なんとか、なるんべ。

昌代

なんともならなくて、公園で寝るハメになったんでしょ？

信二

……。

昌代

ゆうべ、兄さんから電話があつたの。

信二

何？

昌代

実家に帰ってこいって。

信二

え？

昌代

一度、北海道に帰ってこいって……。

信二 ……。帰るのか？
昌代 決めて。あなたが。

昌代、下手奥に去る。
信二、灰皿に煙草を消す。

信二 ……おふくろ、ゲンコ、強すぎだつて……。

ヒグラシの声。
溶暗。

日曜日。

早朝。

すでに蝉の声はしない。

扇風機も片付けられている。

麻佑が姓名判断の本をひろげている。生まれてくる従兄弟の子につける名前を指で宙に書き、その画数をかぞえている。

麻佑

……3・4・5……。

沼田が野球のユニフォーム姿で作業場から現れる。

沼田

シーンさん。

麻佑

あ……。

沼田 あ、麻佑ちゃん、どもども。

麻佑 どうも……。 (奥に) パパあ、沼田さん、きたよー。

(声) おう。

沼田 どう？ 調子は。

麻佑 はい？

沼田 受験勉強、はかどってる？

麻佑 ああ、まあ……。

沼田 やっぱ、東京、行くん？

麻佑 え？

沼田 東京でアパート借りて、ひとり暮らし、するん？

麻佑 ああ、まあ、受ければですけど……。

沼田 受かるよお。沼田のおじさん保証する。保証書つけちゃう。

麻佑 それは、どうも……。

沼田 大学では何、勉強するん？

麻佑 一応、第一志望は法学部なんですけど……。

沼田 じゃ、将来は弁護士だ。

麻佑 まさか。あたしが司法試験なんて受かりっこないに。

沼田 んなことなかんべ。

麻佑 ありますよ。

沼田 どうして？

麻佑 パパの娘ですよ？

沼田 ああ……。

信一、ユニフォームのベルトを締めながら現れる。

信一 沼ちゃん、おはよー。

沼田 あ、シンさん、おはようございます。

信一 (麻佑に) 信二は？

麻佑 知らない。

信一 あのやろ、まさか逃げたんじゃなかんべな？

と、下手前から信二、現れる。

沼田 あ、おはようございます。

信二 (ユニフォームの肩を気にしながら) おはよう……。

沼田 じゃ、シンさん、車、こっちへ回してきちゃいます。

信一 うん。

沼田 (空を見上げ) 雨、大丈夫かなあ？

沼田、去る。

信二 でかくね？

信一 あ？

信二 なんか肩、落ちちゃってるし。(麻佑に) でかいよねえ？

麻佑 んん……。

信一 そんなもんだんべ。

信二 いや、でかいって。

信一 しょうがなかんべ。ナベのお下がりがりなんだから。

信二 ナベが巨漢だなんて聞いてねえし。

信一 男のくせに、ぐちぐちぐちぐちぐちこまけえことを。だったらお前の方がで

かくなれ！ 牛乳飲め、牛乳！

信二 は？

信一、上手奥に去る。

信二 ……。

麻佑 持ってこよっか？

信二 え？

麻佑 牛乳。

信二 あ、いやいや……。

麻佑 冗談だに。

信二 ……。昌代は？

麻佑 弁護士の先生んとこ行くつて、さつき……。

信二 ああ、そつか……。

麻佑 大丈夫？

信二 まあ、(ユニフォームが)小さいよりは……。

麻佑 怪我よ。

信二 え？ ああ、うん。大丈夫。

信一 (声) おい、信二い！ さつきとしろよ。沼ちゃん、待ってんぞ。

信二 (外に) 今、行くよ！

麻佑 あんまり無理しないでね。

信二 おう。じゃあ、いってきます。

麻佑 いってらっしゃい。

信二、上手奥に去る。

信二（声）　なんだよ、靴もでけえ……。

由美子、下手奥から現れる。

由美子　あら、出かけた？

麻佑　うん。ねえ、ママ。

由美子　ん？

麻佑　「秀実」って、どう？

由美子　え？

麻佑　ナツちゃんの赤ちゃん。これなら生まれてくるのが男でも女でも、いけ

そうだに？

由美子　そんなことより時間いいの？

麻佑　え？

由美子　キョーコちゃんと約束してんでしょう？

麻佑 ああ。気が重いなだよなあ。どうせ東京の自慢話、聞かされることになるんだに。しょもない。

由美子 だったら最初っから約束なんかするんじゃないの。

麻佑 女には、やらないやいけないときがあるのよ。

由美子 何、言ってるんだか。

康裕（声） ごめんくださいーい。

由美子 はあい。

麻佑 あたし、出たげる。

麻佑、上手奥に去る。

由美子、片付けなどする。

やがて麻佑、戻ってくる。

続いて康裕。

麻佑 どうぞ。

由美子 あら、康裕さん。

康裕 おはようございます。

由美子 おはようございます。聡子さんは？

康裕 いや、今日は、一人で。

由美子 そう。珍しい。

康裕 お義兄さんは……？

由美子 野球の試合。

康裕 いや、信二さん……。

由美子 も。

康裕 え？

由美子 信二さんも野球なの。お父さんたちの助っ人で。

康裕 ああ、そういうことですか……。

麻佑 (本を開き) 康裕おじちゃんも調べてあげる。

康裕 え？

麻佑 ここだ。(読んで) 「生真面目な性格で、出世の階段を昇りつめます」。

だつて。いいに、いいに。

康裕 占い？

由美子 姓名判断よ。

康裕 姓名判断？

由美子 当たるのよお。

康裕 はあ。

麻佑 あ、ヤバツ。こんな時間。あたし、マジで行かないと。

由美子 傘、持っていきなさいよ。夜、雨だつていうから。

麻佑 ほーい。

由美子 あんまり遅くなるんじゃないわよ。

麻佑 ほーい。

由美子 その「ほーい」つての、やめなさい。

麻佑 ほーい。

麻佑、去る。

由美子 まったく……。あ、どうぞ、座って。

康裕 あ、はい……。

由美子 お茶を。

康裕 どうぞ、お構いなく。

由美子、下手奥に去る。

と、信二、戻ってくる。

信二 あれ？

康裕 あ……。

信二 康裕くん。どしたん？ こんな時間に。

康裕 早い方がいいと思ひまして。

信二 え？

康裕 これ。

康裕、上着のポケットから封筒を取り出す。

康裕 遅くなりましたけど。

信二 何？

康裕 ちようど二百万円あります。

信二 二百万？！

康裕 シッ！……くれぐれも聡子には内緒で……。

信二 どしたん？

康裕 あのときは、てつきりまた賭け事に使うんだと思って、テキトーに、あれしちゃいましたけど……。

信二 ああ……。

康裕 使ってください。余裕ができたとき、ちよつとずつ返してもらえればいいですから。

信二 気持ちだけ、もらっとくよ。

康裕 はい……、はい?!
信二 もう、済んだから。
康裕 済んだって?
信二 免責の通知、出たから。今、昌代が弁護士んところへ取りに行ってる。
康裕 メンセキ?
信二 自己破産。
康裕 ……破産、ですか?
信二 うん。
康裕 そうですか……。
信二 けど、さすがだね、大企業のサラリーマンともなると、二百万もの大金を、ポンと……。
康裕 いや、ぜんぜん、ポンでは……。
信二 そ?
康裕 そりや、そうですよ。保険、解約したり、いろいろ掻き集めて……。
信二 そりや、悪いことしちゃったね。

康裕 ……。

信二 じゃあ、これ、一旦俺が預かって、倍にして返してやろっか？

康裕 え？

信二 手堅いレースがあるんだよ。

康裕 ……。

康裕、あわてて封筒を懐にしまう。

信二 冗談だに。

由美子、お茶を持ってくる。

由美子 あら？ 信二さん。野球じゃなかったの？

信二 あ、いけね。グローブ取りに来たんだった。

信二、上手前に去る。
雨の音。

由美子 どうぞ。(と、お茶を)

康裕 どうも。

由美子 あ。降ってきたわね。

康裕 え？

由美子 雨。

康裕 ああ……。

由美子 いけない！ 洗濯物……。

由美子、下手奥に去る。

康裕、懐から封筒を取り出す。

康裕 先に言ってくれよお……。 (座卓に突っ伏す)

溶暗。
雨の音。

同日、夜。

雨が降り続けている。

座卓でユニフォーム姿の信一と沼田がビールを飲んでいる。

信一
足音？

沼田
ええ。夜の九時になると、おもてで、タッタッタッタッタッタッ：
…って。

信一
はあ。

沼田
おふくろが俺を脅かすわけですよ。「オトカが迎えにきたわよ」って。「いい子にしないから井戸に投げ捨てられるのよ」って。俺、恐くて恐くて、「これからはいい子にします」って。

沼田、ビールを飲む。

沼田

あー。……だけど、毎晩続くんだから、おふくろも自分で言ってるんだん気味が悪くなってきたみたいで。それでどうとう確かめに行ったわけですよ。おふくろと俺と二人して。そしたら何だったと思います？
沼田 何って、オトカだんべ？

信一

は？

沼田

今、自分で言ったに。オトカが迎えにきたって。

沼田

いや、まさか。時、すでに、高度成長つすよ？

信一

だって言ったに。

沼田

おふくろがそう言ったって話をしたんですよ。

信一

なんだ、それを先に言つてよ。

沼田

……。

信一

で、何だったん？ オトカじゃなくて。

沼田

ダイエツト。

信一

ダイエツト？

沼田

おむかいのお姉さんが、なわとびしてたんすよ。日の暮れるのを待って、

人知れず痩せようとして。

信一
ああ。

沼田
後の米屋の嫁ですよ。

信一
米屋？

沼田
いるじゃないすか。いかにも米、食ってますっていう。

信一
ああ、あの、太った？

沼田
当時はあそこまでじゃなかったんすけどね。垣根越しに、俺とバツチリ目が合っっちゃって。それ以来、オトカは来なくなっただんです。

信一
……。

沼田
しかしありやあ、オトカっていうより、ぶんぶくちやがま分福茶釜の曲芸だったなあ。ぶんぶくちやがまのもすりんじ。ハハハ……。

いつの間にか雨はやんでいる。

沼田
あ。雨、あがったみたいっすね。

信一 ああ……。

信一、沼田のコップにビールを注ごうとする。が、空である。

信一 (奥に) おーい、由美子、由美子お!

沼田 いやいや、シンさん、もう。そろそろ、お暇しますから。

信一 なんで? まだ、いいに。晩飯、一緒に食ってけば?

沼田 いやいや。明日、また仕事だし、また今度。

信一 そう?

沼田 さて、と。(立ち上がり) ういー、ちつと酔っぱらったかな。あ、車、

信一 そこ、駐めといていいすか? 明日、朝イチで、取りに来ますから。

沼田 うん。

(奥に) 奥さあん。おじゃましましたあ。

返事がない。

信一 買い物かな？

沼田 よろしくお伝えください。弟さんにも。

信一 ああ。

沼田 じゃ、また。

沼田、「雨」にまつわる鼻歌を歌いながら、作業場から去る。
由美子、現れる。

由美子 お父さん……。

信一 なんだ、いたのか。いたなら返事くらいしろよ。

由美子 これ……。 (と、一枚のファックスを)

信一 何？

由美子 発注書。

信一 まーた網戸の張り替えか。

由美子 ガラスです。

信一 お！ 珍しいに。(受け取る) 新築か。

由美子 あの家の跡に建つんじゃないですか？

信一 あの家？

由美子 お父さんたちの実家。

信一 え？

由美子 現場の住所、見てください。

信一 (発注書に目を落とす) ……あ……。

由美子 どうします？

信一 どうって？

由美子 その仕事。断ります？

信一 なんて？

由美子 だって……。

信一 やるよ、もちろん。仕事は、仕事だに。(と、発注書を)

由美子 (受け取る) そうですか。

と、信二、上手前から現れる。部屋着に着替え、濡れた髪をタオルで拭きながら。

信二 やっぱ一番風呂は気持ちいいや。あれ？ 沼田さん、帰ったん？

信一 ああ。

信二 そう。

信一 さて。俺も風呂にすつか。

信一、去る。

信二 昌代は？

由美子 まだ。

信二 何やってんだか。あれ？ここに置いといたネックレスは……？

由美子 茶箆笥の上。

信二
ああ。

由美子、下手奥に去る。
信二、茶箆筒の上から昌代のネックレスを取り、ソファに座る。
麻佑、現れる。

麻佑
ただいま。

信二
あ、おかえり……。

麻佑
あー、くたびれた。(どさりと鞆を置いて) ……どう? ほどけそう?

信二
あと、ちよつと……。

麻佑
そう……。野球、どうだったん?

信二
ん?

麻佑
勝ったん?

信二
ああ。中止。

麻佑
中止?

信二 雨で。
麻佑 ああ。

やや間。

麻佑 ちよつと、かして。
信二 え？

麻佑、信二の手からネックレスを取る。

麻佑 (ネックレスの玉を爪でほどこうとしながら) ……信二おじちゃん、東

京タワー、のぼったこと、ある？

信二 東京タワー？

麻佑 うん。

信二 あるけど……。

麻佑 あたし、ないんだ。
信二 そう。でもべつに、たいして面白いもんじゃないよ。
麻佑 キョーコもそう言ってた。面白くなかったって。
信二 キョーコ？
麻佑 高校の同級生。東京の大学、行ってんの。
信二 ああ。
麻佑 のぼった人だけが言えるんだに。
信二 ……。
麻佑 あたしね、海も見たことないんだ。
信二 海？
麻佑 うん。
信二 小学校で臨海学校ってなかった？
麻佑 あんなの海のうちに入らないに。
信二 ……。でも、これからだに。これから、いくらだって行けるよ。海だつて、東京タワーだつて。

麻佑 誰と？

信二 え？

麻佑 あたし、ひとりで？

信二 それは麻佑ちゃん次第だに。

麻佑 ……。あー、やっぱり、あたしの手には負えないわ。

麻佑、ネックレスを座卓に置く。

鞆を持って上手前に去る。

信二、座卓へ移動する。

玄関で「ただいま」と昌代の声。

狐が現れる。

狐 ただいま。

信二 ！？

昌代が狐のお面を被っていたのである。
昌代、お面を脱ぐ。

信二 ……なんだよ。おどかすなよ。どうしたんだよ、それ？

昌代 団地のお祭り。

信二 ああ……。

昌代 (ネックレスに目をやり) まだ、やってたの？

信二 ん？ あ、これ……。

昌代 もう、いいわよ。

信二 でも、あとちよつと……。

昌代 いいわよ、そのままです。つけて。

昌代、信二に背を向けて正座し、うなだれる。

信二 ……。

信二、昌代にネックレスをつけてやる。

信二　で、なんか言ってた？　弁護士。

昌代　あなたに、よろしくって。

信二　……そう……。

昌代、鞆から法律事務所の名前の入った茶封筒を取り出し、信二に手渡す。

昌代　はい。

信二　ん？

昌代　読んで。

信二　ああ……。（書類を取り出して黙読する）やっと一段落いちだんらくだな。
昌代　続けて。

信二
え？

昌代
声に出して、続けて読んで。

信二
……（読む）「破産者について免責を許可する。破産者には破産法25

2条1項各号に掲げる免責不許可事由に該当する行為が認められる：

…が、かかる行為に及ぶに至った経緯、更正の可能性などを斟酌する

と、免責を許可するのが相当である……。

何もかも赦されたわけじゃないのよ。

……わかってるよ。

昌代
何が「わかってる」っていうの？

信二
え？

あの晩、あたし、夢を見たわ。あなたがあたしの前から姿を消した日。

……。

昌代
出口へ向かってるはずだったの。長い階段の途中で、不意にあなたが現

れて、あたしに訊いたのよ。「時間は、まだ、大丈夫？」って。黙って

いると、「じゃあ、急がなくなっちゃいけないね」って、前に向き直ったあ

信二 昌代
昌代 信二
昌代 昌代
昌代 昌代
昌代 昌代
昌代 昌代
昌代 昌代
昌代 昌代
昌代 昌代
昌代 昌代

あなたの背中が暗がり消えて……。あたし、あなたを見失った。それで一人で階段をのぼって行ったの。そしたら今度は後ろから靴音がして……。いつの間にか、あたし、あなたを追い越してたのね。

どうしてあたしを置いて消えたの？

え？

どうして？

……。

どうして黙ってるの？

(溜息をつく)

どうして溜息なんかつくの？

昌代……。

ねえ、どうして？！

もう、いい加減にしないか！

……。引き返そうとしたら鉄の扉にぶつかったの。

信二

え？

戻れないんだって覚悟したとき、扉のきしむ音がして、中から光があふれ出て……そうしてあたし、目が覚めたの。

昌代

昌代、信二を見つめている。

信二は身動きすることもできない。

昌代、上手前に去る。

信二

……。

座卓に狐の面が残された。

信二、それを手に取る。

と、どこからか足音がする。

タッタッタッタッタッタッタ……。

信二
（音のする方を振り返り）
……。

暗転。

数ヶ月後。
冬。

部屋の隅に石油ストーブ。
座卓に由美子と聡子。お茶を飲みながら。

由美子 ……転勤?!

聡子 うん。

由美子 康裕さん、会社で何か、やらかしたの?

聡子 え? いや……一応、栄転なんだけど。

由美子 エーテン?

聡子 本社の営業課長になったの。

由美子 なんだ。すごい!

聡子 たいして、すぐくもないのよ。同期の中じゃ、出世、遅い方だし。

由美子 でも、よかったに。

聡子 まあね。

由美子 おめでとう。

聡子 でも、まあ、そう喜んでばかりもいられないんだけどねえ。

由美子 どうして？

聡子 だつて考えてもみてよ。あの人が、いきなり営業課長だなんて、そんな大役がつとまると思う？

由美子 そつか、そうよねえ……。

聡子 ちよつと！そこは乗つかつてこないでよ。謙遜して言ってるんだに。

由美子 ああ……大丈夫よ、康裕さんなら！

聡子 もう遅いわよ。

由美子 ……。それで、いつ？

聡子 ん？

由美子 引っ越し。

聡子 年明け、すぐ。

由美子 そんな急に?!

聡子 これがサラリーマンの宿命ってやつよ。

由美子 そつかあ……。寂しくなるわね。聡子さん、東京へ行っても、ちよくちよく連絡してきてね。

聡子 お義姉さん、何、言ってるの？ あたしは、こっちに残るわよ。

由美子 え、なんで？

聡子 あたしは、あたしで、いろいろあるもん。

由美子 いろいろって？

聡子 団地の副理事長だし。

由美子 そんなの、誰かに代わってもらえばいいに。

聡子 だいいち、あの子だって、転校させんの、可哀想だに。

由美子 ……。じゃあ、康裕さん、単身赴任？

聡子 そゆこと。

由美子 でも、いいの？ それで。

聡子 何が？

由美子 何がつて……。

麻佑、上手前から現れる。

麻佑 あ、聡子おばちゃん、いらっしやい。

聡子 どーも。

麻佑 ママ、なんか、食べるもん、ない？

由美子 さっきお昼食べたばっかだに。

麻佑 頭使うと、お腹すくのよ。

由美子 デブんなるわよ？

麻佑 なりません。若いから新陳代謝がいいんです。

信一、上手奥から現れる。

信一 ただいま。

由美子 あ、おかえんなさい。

聡子 おかえりい。

信一 おう、聡子、来てたのか。麻佑、勉強、終わったんか？

麻佑 ちよつと休憩。

信一 休憩が多すぎだんべ。

麻佑 あたしにはあたしのやり方ってもんが、あんの。

由美子 冷蔵庫になんかあったでしょ？

麻佑 ……。

麻佑、下手奥に去る。

と、玄関でチャイムが鳴る。

由美子 あ、はあい。

由美子、上手奥に去る。

聡子 ……で、どうだった？

信一 ん？

聡子 来た？

信一 何が？

聡子 見積。興信所。

信一 ……ああ。

信一、茶箆筒から見積書を取り出す。

信一 ……ほれ。

聡子 どれどれ。(ひろげて、固まる) ……こんなにい?!

信一 だからよせて言ったんべ？ んな、墓を掘り返すようなこと。

聡子 だって、気になるに？

信一 今さら知ったところで、何がどうなるもなかんべ？

聡子 そりゃ、そうだけど……。あたしいろいろ考えたのよ。

信一 何を？

聡子 だからカオル。腹違いの妹なんじゃないかって。

信一 え？

聡子 パパがよその女に生ませた子。戸籍にも載ってないんだし、それしか考えられないに？

信一 ……。

聡子 相手の女って誰だろう？

信一 調べたきやおまえ、一人でやれ。うちは、びた一文、出さねえぞ。

聡子 ……。

由美子、荷物を抱えて戻ってくる。

信一 何だ？

由美子 鮭ですって。

信一 え？

由美子 昌代さんから、お歳暮。

信一 ああ。

由美子 今頃、雪かしらね、北海道は。

信一 ん……。

聡子 だけど、うまくやっついていけてんのかなあ、あちらの家族と。信二兄さん。

信一 やってくしか、しょうがなかんべ。

聡子 そうだけど……。

麻佑、戻ってくる。

麻佑 ママ、あたしのメロンパンは？！

由美子 え？

麻佑 メロンパン！

由美子 冷蔵庫に、ない？

麻佑　　ないから聞いてんだに！
信一　　なんだ、あれ、食っちゃいけなかったのか？
麻佑　　……。信じらない！

麻佑、上手前に去る。

信一　　……。

聡子　　やっぱりあたしもついて行こつかなあ？

信一　　え？

由美子　　それがいいわよ。

信一　　何？

聡子　　そうしよ。そうと決まればいろいろ準備もあるし、あたし、帰るわ。じ

や、兄さん、また。

信一　　は？

聡子、上手奥に去る。

信一 何なんだ？ あいつ……。

由美子 転勤ですって。

信一 え？

由美子 康裕さん。

信一 康裕くん、会社で何か、やらかしたのか？

由美子 栄転ですって。

信一 エーテン？

由美子 本社の課長になったんですって。

信一 ああ、なんだ、そうかあ……。

由美子 お父さん、お茶は？

信一 ん。

由美子、お茶をいれる。

由美子 (湯飲み茶碗を置き) あ、そうそう。ナツちゃん、男の子ですって。

信一 え？ 生まれたのか？

由美子 ええ、今朝。

信一 そうか。

由美子 5500グラム。

信一 でかすぎだんべ！

由美子 タダシですって。

信一 え？

由美子 名前。「正しい」って書いて。タダシ。

信一 さんざん悩んだ割に、結局、そんなところへ落ち着いたのか。

由美子 最後はナツちゃん、自分で決めたって。

信一 ふうん。ま、それが一番だんべ。

由美子 ええ。

からっ風が吹いている。

由美子 また、風の季節ですね。

信一 ああ……。

由美子 なんか、あたしたちだけ、おいてけぼりみたい。

信一 ……。

由美子 そろそろ、おこた、出さないと。ねえ？

信一 ん？ んん……。

由美子、荷物を持って下手奥へ去る。

信一、煙草を取り出し、一本、口にくわえる。

灰皿を取りに立つ。

と、茶筌筒のガラスの奥に「姓名判断」の本を認めた。

信一、灰皿と本を手に座卓に戻る。

と、麻佑がリュックを背負って現れる。

信一 出かけんのか？

麻佑 ……。(無視して行こうとする)

信一 おい、麻佑！

麻佑 (立ち止まり) ……予備校。

信一 今度、海、行くか。

麻佑 え？

信一 海。

麻佑 ……何、急に？ あたし、受験生なんですけど。

信一 受験、終わったらだに。

麻佑 ……ヘンなの。

麻佑、上手奥へ去る。

信一、煙草に火をつける。

音楽。

信一、本を開き、指に挟んだ煙草で宙に文字を書く。

誰の名を書いたのか、煙の文字はゆらゆら定まることなく、消えていく。背後の障子に灯りが入る。

音楽、高鳴る。

からっ風の音、遠くなる。

父の影を残しつつ、溶暗。

〈幕〉

沼田	康裕	聡子	昌代	信二	麻佑	由美子	信一
：	：	：	：	：	：	：	：
中井亮	尾山道郎	佐藤詩音	小川由樹枝	田辺誠二 (ダブルフォックス)	船場未生 (劇団朋友)	歌野美奈子	神門駿兵

上演 2017年11月9日(木) ～ 12日(日)
全4ステージ
場所 調布市せんがわ劇場

作・演出・音響・美術 今井一隆

舞台監督 宮田克徳

照明 高橋清志

撮影 ホワイトホール(株)

制作 高橋俊也 (THEATRE-THEATER) / ピタパタ制作部

企画製作 ピタパタ

協力 ダブルフォックス / 劇団朋友

今井一隆

1968年、群馬県生まれ。北海道大学経済学部経営学科卒業。

大学在学中に札幌の劇団デパートメントシアター・アレフに参加。小劇場、野外劇などの公演に出演。上京後に戯曲の執筆・演出を開始し、自らのプロデュースで自作戯曲を演出・上演。その他、外部劇団への脚本提供、児童劇の演出等も手掛けている。

おもな作品：「水の中の天使」（第20回神奈川県演劇脚本コンクール奨励賞）、「温室の花」（第24回文化庁舞台芸術創作奨励賞佳作）、「痕-KON-」（第26回文化庁舞台芸術創作奨励賞特別賞）、「ジョマクノギ」（第25回名古屋文化振興賞佳作）、「オトカ」（「日本の劇」戯曲賞2010最優秀賞）。

オトカ（「日本の劇」戯曲賞2010最優秀賞）

2017年8月1日発行

著者 今井一隆

発行所 ピタパタ

川崎市多摩区菅 6-1-41-201

電話 044-945-6690

印刷・製本 第一資料印刷(株)